



ボウクンさん・ドンチェヴァさん 来日迫る！ (戸村 京子)

チェルノブイリ救援・中部がこれまでずっと、団体パンフレットの表紙に使わせていただいてきた 8 才の女の子アヌーシカちゃん（事故当時 4 才：左の写真）は、今では 3 歳の男の子の素敵なお母さんです（右下の写真）。そのアヌーシカちゃんのお母さんが、今回来日されるカテルィナ・ボウクンさん。カテルィナさんは、チェル救設立間もない 1991 年に、チェルノブイリと日本の母親同士の文通の呼びかけに応え、私たちの心に響く手紙を送ってくれた人です。

そこには「世界で初めて核戦争の悲劇を味わった国の親愛なる皆さん。私も同じような恐ろしい事故で苦しんでいる、自分の子どもの健康が心配でならない母親です。…それは、私たちの一番幸せな日…新しい住居への引っ越しの日に起こったのです。夕方にはお客様を呼んで、新しい家での生活に喜びもひとしおでした。でも夜になってあの恐ろしい瞬間が起きました。避難があり、新しい生活もみな、夢のものになってしまったのです」と、綴られていました。そして愁いを帯びた表情の少女の写真が添えられていました。

この手紙を読んだ私たちは、彼らチェルノブイリ被災者の悲しみ、健康への不安はいかばかりか…と、心を動かされました。原発大国日本私たちにとっても、他人ごとではない…と。

事故から 10 年後の 1996 年にも、チェル救宛に「あの美しいプリピヤチの街を後にして、10 年になります。アヌーシカは成績は良いのですが、よく病気をするので欠席が多いのです」と書いていました。私たちは、遠い日本から彼女たちの健康を祈りました。あの女の子は少女に成長していました。（P2 へつづく）



〒460-0012 名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST プラザ鶴舞 5 階 B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀 行 名：三菱東京 UFJ 銀行 高畠支店(店番号 297)

座 番 号：普通 1682863

座 名 義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵 便 振 替：00880-7-108610

T E L / F a x : 052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

(P1 から) そして福島の事故後には、次のような励ましのメッセージを送ってくださいました。 「2016 年 4 月 26 日は、切尔ノブイリの悲劇から 30 周年の記念の日…私たちの不幸に一番に応えてくださったのは日本でした…。現在フクシマ原発の悲劇に向き合っている皆さん、私たち全てのウクライナ人から同情のご挨拶を送りたいと思います。親愛なる日本のお友達のご健康、力強さ、人生の全ての困難に打ち勝つ気力がもたらされることを願っています。あなた方は強く、必ずや困難に打ち勝たれることと信じています。」そして、男の赤ちゃんを抱いて微笑むお母さんになったアヌーシカちゃんの写真 (P1 右下) も一緒に。

このように、8,000 キロも離れ、国の体制も文化も暮らし方も違う、ウクライナと日本の市民の間に、多くの友情が生まれ、共感しあい、つながりは続いたり途切れたりしながら、ひとたび福島の事故が起った時には、いち早く励ましの心を送ってくださいました。

2017 年 10 月にウクライナを訪問した時には、5 つの被災者の団体と円卓会議を持ちましたが、切尔ノブイリの母親の方々とも円卓を囲んで交流しました。その中には、ボウクンさんも離れた村から参加してくださいましたので、今回の来日へ向けて、打合せもしました。

「切尔ノブイリ／フクシマ講座」では、2015 年頃からウクライナの母親から寄せられた『切尔ノブイリからの手紙』を読む交流会を、南相馬市や名古屋市で行っています。やっと実現したこの機会に、ぜひ直接ボウクンさんに会って、貴重な体験やウクライナの日常の暮らししづらなどについて、お話を聞いていただきたいと思います。

ボウクンさんと共に来日するのは、ウクライナのカウンターパート「切尔ノブイリの人質」基金のスタッフ、エヴゲニヤ・ドンチェヴァさん。長年にわたり切尔救と連携しながら、現地で被災者の支援を行っていらっしゃいます。

事故処理作業者（リクビダートル）団体の支援の他、近年はクリスマスカードキャンペーンなどを通して、日本とジトーミル州の多くの学校・幼稚園などと活発に交流を図って活動されています。そのような異文化交流活動についても、エピソードがたくさん聞けることでしょう。

皆さま、ぜひ万障繰り合わせて、講演会場へお越しください。お待ちしています。

ボウクンさん、ドンチェヴァさん来日に当たって

(南箕輪村 原 富男)

ウクライナのボウクンさんとドンチェヴァさんが、私の住む伊那市・南箕輪村と松本を訪問することになった。来日の発案は、南相馬市の小林夫妻なのだが、せっかく来日するなら南相馬市に加え、長野県や名古屋にも寄っていただけないかと考え相談した結果、幸いにも両方が実現することになった。

南箕輪村では、2 月 14 日に村民センターで、お二人の講演会と交流会が行われることになった。また日程の都合で空き日ができたため、せっかくの機会だからという事で、松本の「切尔ノブイリ連帯基金」の事務局長（神谷さん）にお願いし、連帯基金の建物で懇談会と交流会を開いていただけすることになった。松本では、ボウクンさん・ドンチェバさんの話に加え、福島から長野県に避難しておられるお母さんも参加されることになり、交流が行われることになった。

ボウクンさんは、切尔ノブイリ救援・中部ガウクライナのお母さん達と文通を始めたときに知り、娘のアヌーシカちゃんの写真は文通のシンボルとなってきた。私はこれまで 3 回ほどお会

いしているが、顔と名前を覚えるのが苦手で、親しくする機会がなかったが、3年ほど前にウクライナを訪問するに当たり、「アヌーシカちゃんに赤ちゃんが生まれた」というので、お土産に靴下を買ってプレゼントしたことがある。これがボウクンさんと親しくなる実際のきっかけになった。

昨年10月にウクライナを訪れた時には、ボウクンさんの来日は決まっており、現地での円卓会議で改めて、原発労働者の町プリピヤチからジトーミルに避難したボウクンさん達の話を聞きし、その苦労を知ることになった。現在、年金生活者であるボウクンさんは、律儀にも訪問の度にお土産を持たせてくれ、何とも申し訳ない思いだ。ボウクンさんは、いつも自宅から1時間かけて会いに来てくれる。ボウクンさんには、プリピヤチでの生活・避難・移住先の生活などについて話していただく予定だ。

ドンチェヴァさんとは、ずいぶん長い付き合いだ。以前はホステージ基金代表のキリチャンスキーさんを助け働いていたが、キリチャンスキーさんが亡くなつてからは、ホステージ基金の事務一切、切り盛りしている。 Chernobyl 救援・中部関連の仕事ばかりか、取材や研究目的の訪ウの日本人にも親切に接し、面倒を見ている。

ドンチェヴァさんからは、Chernobyl 救援の支援先である病院や、事故処理作業者・幼稚園・学校などの付き合いの中から見えてくることを、話してもらいたいと思う。

お二人が見えることで、南相馬市や長野県に避難している親たちが共通の理解で結ばれ、元気になってもらいたいと思う。

Chernobyl 原発事故の被災者の経験を学ぶ

(放射能測定センター・南相馬 とどけ鳥 小林 友子)

3回目のウクライナ訪問で、ウクライナの皆様の誠実さと大変な現実に向き合う姿を見て、福島で生きていく勇気をいただきました。それから私達を優しく迎えてくれた事に感謝します。

Chernobyl 原発事故から31年が経ちました。福島原発事故からは6年が過ぎ、事故の被害に遭われた状況が違っていても、まだまだ Chernobyl から学ぶことがあります。その事を、福島の人々に伝えたくて、「Chernobyl の母親からの手紙」という冊子の企画者である Chernobyl 救援・中部の戸村さんから、ぜひとも、手紙を書いてくれた一人であるボウクンさんを招聘して、福島・長野・愛知で講演会を開きたいと話をいただき、実現する事ができました。

これも、福島と Chernobyl を繋いでくれた、 Chernobyl 救援・中部のこれまでの活動のお陰だと感謝しております。

この講演会用の冊子を発行するにあたって、 Chernobyl から福島に、素晴らしいメッセージをいただきました。ぜひお読みください。福島の人の思いと同じではないかと思います。そして講演会で話してくださるホステージ基金のドンチェヴァさん、寄せられた手紙をウクライナ語に訳してくれた竹内さん、英訳してくれた穎川(えがわ)さん、冊子の企画制作をてくれた神野さん、杉田さん、ありがとうございました。良い講演会になるように頑張ります。



〈前列右端 ドンチェヴァさん〉

南相馬便り

(神野英樹)

南相馬に赴任して、あっという間に4ヶ月が過ぎた。日々新たな問題が発生し、忙しく駆けずり回っているが、裏を返せば、それだけ毎日が充実しているということである。

*2月10日(土)11時~

「信田沢搾油所」の開所式！

- ・「開所式」が2月10日に決定し、「工程表」を作成しての進捗管理が始まった。「来賓への案内状発送」「開所式の式次第作成」「会場の設営」「搾油機・濾過器・充填機、打栓機・シンク(流し台)などの調達」「オペレーター研修・試運転」「行政への書類提出」等々、漏れや遅れが生じないよう慎重に進めている。幸い、現在まで計画通りに進捗している。



<「信田沢搾油所」の外観(完成予想図)>

*第14期汚染マップ配布完了！

- ・とどけ鳥のボランティアさんたちの協力のもと、マップ掲載拠点への配布が完了した。
- ・毎回、富岡町の測定は実施の時期が1ヶ月近く遅く、マップの完成も遅れるが、今回は「南相馬」「浪江」「富岡」のマップを、3点セットで配布したかったこともあり、配布時期が少し遅くなつた。しかし、この方が効率も良く、受け

取る市民の方々にも喜ばれると思う。

- ・次回(第15期)の測定までに、①「富岡町の測定も同時期に行い、3地域の『合体マップ』を作成して配布する」、②「測定時に用いる地図を、最新版(所番地入り)に更新する」…という、2つの課題をクリアしたい。

- ・次回(第15期測定隊)は、

「第30次…4月14日(土)～15日(日)」

「第31次…4月21日(土)～22日(日)」

…と設定した(皆様のご協力をお願いします)。

*クリスマスカード配布完了！

- ・12月13日から12月22日にかけて、南相馬市原町区の幼稚園・保育園に(そして今年度は、小高地区の中学校・高校にも)、クリスマスカードを贈り届けることができた。ただし、ウクライナからのクリスマスカードが、税関で長期間止められ、「日本(南相馬)になかなか到着しない」というトラブルも発生。

- ・私達は、「クリスマスに間に合わなくなる！？」…と言って、ヤキモキしていたが、ウクライナのドンチェバさん曰く…「時間を気にするのは大人達だけ。子ども達は、一つプレゼントをもらって嬉しいもの」…という言葉に、ハッとさせられた。時間に追われてあくせくするのは、私たち大人の悪い癖なのかも知れない。

*上がらぬ「帰還率」！

- ・一足先(☆2016年7月12日)に「避難解除」となった「南相馬市小高区」に続き、昨年の春(★2017年3月31日&4月1日)に、「浪江町」「富岡町」「飯館村」「川俣町」の一部地域で、「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」の解除(避難解除)が、発令された。これにより、当該区域の「帰還率」がどのようにになっているかを記しておく(下表参照)。

| 地区 | 震災直前の人口 | 直近の人口(○○年○月○日現在) | 帰還率 |
|------|---------|------------------------|-------|
| 鹿島区 | 11,603人 | 10,894人(2017年12月31日現在) | 93.9% |
| 原町区 | 47,116人 | 41,036人(2017年12月31日現在) | 87.1% |
| ★小高区 | 12,842人 | 2,412人(2017年12月31日現在) | 18.8% |
| ★飯館村 | 6,509人 | 505人(2017年12月1日現在) | 7.8% |
| ★富岡町 | 15,960人 | 376人(2017年12月1日現在) | 2.4% |
| ★浪江町 | 21,434人 | 440人(2017年11月30日現在) | 2.1% |
| ★川俣町 | 15,877人 | 278人(2017年12月1日現在) | 1.8% |

福島県の小児甲状腺がん

福島原発事故から、間もなく 7 年目を迎える。チェルノブイリの経験を活かさないまま、日本政府は原発再稼働を進め、オリンピックを控えて、事故は無かったかのように年間 20mSv 以下の汚染地域も規制解除し、「アンダーコントロール」を PR している。しかし、事故の影響は確実に起こりつつある。その一つが小児甲状腺がんの増加である。チェルノブイリ事故の後、IAEA（国際原子力機関）は事故の影響について、最も多い心臓病や脳血管病については認めなかつたが、小児甲状腺がんの増加は認めざるを得なかつた。しかし、日本の政府や医療関係者は、小児甲状腺がんの増加も放射能の影響とは認めず、混乱が広がっている。

小児甲状腺がんは増加中

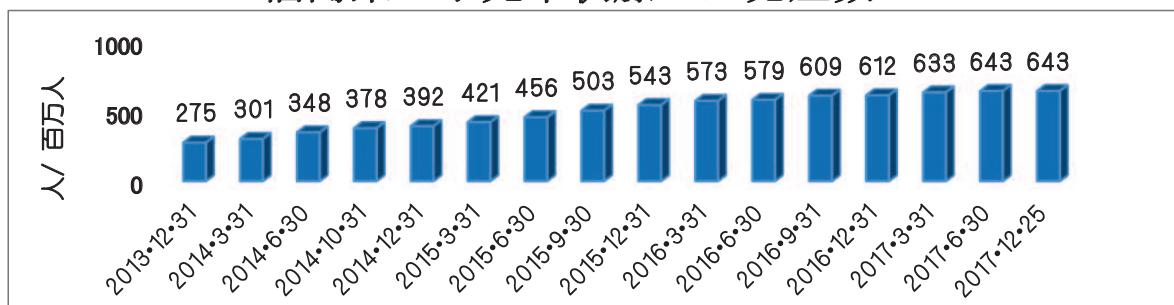
下の図は原発事故後、福島医大が事故時 18 歳以下の児童の甲状腺を検査し、県が「県民健康調査」で甲状腺がんと認定した人数（発症率）の変化を、筆者がグラフ化したものである。これまで 38 万人余の検査が行われ、2017 年 12 月までに 193 名の甲状腺がん患者が見つかった。18 歳以下の 1,556 名に 1 名が、甲状腺がんである。この結果に対し、県や福島県医師会は「放射線の影響とは考えにくい」としている。その根拠は、チェルノブイリと違い日本の検査精度は格段に良く、本来なら見つからない「潜在がん」まで見つけた可能性があること、チェルノブイリでは事故後 5 年目以降に甲状腺がんが発生したことを挙げている。しかし、これはどちらも根拠がない。日本の検査精度が高いだけなら、検査開始から 4 年間で癌の割合が 2 倍以上に増加するはずがない。またウクライナ・ベラルーシでも、小児甲状腺がんは事故から 3~4 年以内に増加している。被曝線量が少ないというのも虚

偽である。何故なら、事故直後に甲状腺の被曝を測定せず、空間線量から推定しているだけだからである。疫学的に正確な調査をするなら、被曝の少ない東京などを対照地域として、福島と同数の 38 万人の児童の検査をして比較すべきである。

更に問題がある。これまで対象児童らは 3 巡目の検査が行われたが、1 巡目 2 巡目で「癌ではないが経過観察は必要」とされた 2,523 名について、その後「甲状腺がんが確認されても発表の対象外」として、県は公表して来なかつた。「患者を不安にさせないために、今後検査を縮小すべし」との意見を、県医師会は表明している。こうした動きはますます事実を不明にし、放射能の影響を分からなくする以外の何ものでもない。乳癌その他の癌検診は早い方が良いと言いつつ、甲状腺がんはこれ以上検査しない方が良いというのは、事実を隠す以外の何ものでもない。

（2018 年 1 月 25 日 河田）

福島県の小児甲状腺がん発症数



「ちいさな黄色い手紙プロジェクト」報告 ウクライナ訪問記

12月7日の夜に成田を発ち、加藤と葉山は「ちいさな黄色い手紙プロジェクト」のために、ウクライナに向かいました。2017年の春から準備してきた本プロジェクトは、豊橋を起点に福島とウクライナを、子ども達の絵によって繋げるものでした。すでにウクライナには、児童画約130作品を送っており、ジトーミルの青少年芸術センター・第12小学校・Liceum（理数系科目に特化）第25小学校・ナロジチのお陽さま幼稚園・オヴルチの第3小学校に分配されました。今回、我々はチェルノブイリ原発の見学ツアーへの参加と、児童画の各展示会場の巡回訪問、4か所でのワークショップの実施、事故処理作業者の日のセレモニー出席を目的としました。

チェルノブイリの今、復興する子どもたち

(葉山 亮三)

今回のプロジェクトのきっかけとなったものは、愛知県渥美半島の菜の花です。その地は私の出身地であり、私の実家でも菜の花を植えています。そんな菜の花が現在の職場である福島県、ウクライナをつなぐツールになったこと、その機会に携われたことに感謝しております。福島は震災からの年月を重ね、まもなく7年が経とうとしています。まだ立ち入りが困難な区域、富岡町は来年度から学校が町に戻ります。そのような状況の中、ウクライナでチェルノブイリ原発事故からどのように時間が流れてきたのか、現地で知ることは非常に貴重な経験でした。

私たちは12月9日、首都キエフを出発しチェルノブイリ原発ツアーに参加しました。ゾーンと呼ばれる原発周辺30キロ圏内に入り、廃墟となった周辺の町々、原発に新たに覆われた新石棺を見てきました。今なお、ゾーンの立ち入りは厳重な管理がなされており、いかなる植物、施設に触れないこと等を誓約しなければなりません。31年という時間の流れを経て、廃墟と化したその地に対し、私はネガティブなイメージを持っていました。ゾーンに入り、最初に立ち入った廃村では多くの民家に苔が生え、床や壁・屋根が崩れかけています。その民家に覆いかぶさるように、木々が生長しています。寒いこの地に降る雪のためか、民家を包むように生長を続ける自然によって、村が飲み込まれるようでした。特に印象的であったのは、プリピヤチという町の様子でした。川沿いに建つステンドグラスが見事な喫茶店、飛び込み台まで完備した室内プール、立ち並ぶマンション、大きなマーケット、遊園地。当時の豊かな生活、町の様子を想像することができます。その地を見て、知ることでイメージされるのは、31年前が幸福な様子であったこと。この体験を的確に表す言葉を私は今も持っていません。

12月12日、私たちはジトーミル市内Liceum第25小学校を訪れ、絵巻物に菜の花を描くワークショップを行いました。教室に入ると、出迎えてくれた子どもたち、展示された愛知の子どもたちの菜の花の絵、画面に映し出された菜の花畠の様子、準備は整っていました。愛知・福島・ウクライナ、「地域は違えども、子ども達が表現することに共通点はあるはずである」、そして「その表現



<第12小学校にて菜の花畠の完成
(2017.12.11)>



<青少年芸術センターにて
(2017.12/12)>

は子ども達の今を写す、写し鏡である…このようなコンセプトを持って訪れた私たちにとって、とても実践しやすい環境でした。27名の子ども達が参加し、菜の花の茎の様子、葉の様子を描いた後、咲き誇るように黄色の花びらを描きました。健やかな子ども達が描くものは、どの地にあっても魅力ある表現です。描かれる菜の花は大小様々、大きく手が動く子、丁寧に描きたい子、それぞれの子どもの様子を見て取ることができます。菜の花の周りに飛び交う生き物、虹や雲、太陽を描いて仕上げました。

12月13日、私たちはナロジチのお陽さま幼稚園、オドルチの第3小学校に向かいました。これらの地区は、かつて避難区域であり事故後7年経ったところで解除され、人が戻ってきたと聞きました。福島ももうすぐ7年の時間が経とうとしている今、その両地で未来を担う子ども達はどのような様子であるのか、現地で実情を感じ取ることができました。お陽さま幼稚園では、日本からの支援、事故後の経過、そして子ども達の保育の様子についてお話を聞きしました。第3小学校ではワークショップを行い、これまでの描画に加えて、切り紙で蝶を切り出し作品に加えました。これは、ウクライナでも切り紙の文化が盛んであったことから内容に加えたもので、文化交流を交えた作品となりました。

誇りと希望の象徴

(加藤 克俊)

11日、キエフからジトーミルに着き、今回のプロジェクトにおいてウクライナでの様々な準備手配をしていただいた「チェルノブイリホステージ基金」のドンチェヴァ氏と合流しました。14時に第12小学校に伺うと、ウクライナでの最初のワークショップの始まりです。30cm幅のロール紙に菜の花畠を描く活動は、日本の絵巻物をヒントに文化の交流を意図したものでした。絵巻物は終わりなく続いていきます。豊橋から福島、そしてウクライナと繋げてきました。また、水色の紙を選んだことで、そこに黄色い菜の花畠を描くとウクライナカラーにもなります。床にロール紙を広げ、子ども達(7~8歳、16名)が位置に着くと、目を閉じるように指示します。「皆さんは今、菜の花畠にいます。きのうは雨が降って、地面が湿って水たまりもあります。耳元に虫が飛んできました。太陽が出てきてあたたかくなってきました。あ！空には虹がかかっています。草の青い匂いがします。深呼吸しましょう。さあ、目を開けて。今見えた景色を描いてみましょう。」と言って開始しました。子ども達は集中したまま筆を走らせ、30分ほどで広げたロール紙が埋まってしまいました。途中、日本から持ってきた豊橋、福島と繋いできた絵巻物を子ども達に見せると、先生方も非常に興味深く作品を見比べていました。

12日は、午後から青少年芸術センターにて、「ちいさな黄色い手紙展」のオープニングセレモニーと絵巻物のワークショップです。青少年芸術センターで絵を学んでいる子ども達によって、たくさんの作品とともに、日本の子ども達の作品が展示されました。このセレモニーには、ドンチェヴァ氏の広報によりテレビや記者も来ており、その様子が放送されました。日本とウクライナを結ぶ切り口として、今回のような活動は非常に新鮮に映ったようです。マイクを渡された際には、展覧会のタイトルについて触れさせていただき、「“手紙”とは一方向ではなく、お互いが送り合うものであり、日本とウクライナの文化の交流を意味している」と、話しました。ワークショップには、出品者の子ども達(6~8歳、12名)が参加してくれ、私が話し始めるのを今か今かと行儀よく待っていたのが印象的でした。また、絵の描き方をしっかりと学んでいるせいか、年齢にしてはきれいな線で慎重な筆運びが特徴的でした。美術の教科書を見せていただく機会もありましたが、日本の子ども達よりも“技法”について重点的に学んでいることが分かりました。

ウクライナでの最終日、14日は事故処理作業者(リクヴィダートル)の日です。市内3か所のモニュメントを回り、献花してきました。赤いカーネーションは死者の血を表していると聞きました。



<ジトーミル消防署前にて
(2017.12.14)>



<第25小学校にて集中する子ども達(2017.12.12)>

この日は多くの消防士と警察官が参加します。消防署では事故処理作業者の方たちと昼食をとり、杯を酌み交わし、この日に日本人が来てくれたことを感謝されました。事故後31年が経ったウクライナで、まだまだ現在進行の問題として痛みを抱えている人々の姿と、今回の訪問で接してきたたくさんの子ども達の無邪気な笑顔が対照的でありました。しかし一方で、彼ら大人たちが事故を止めた誇りと、希望を託し、子ども達の未来にウク

ライナの発展を願っている強いまなざしも見ることができました。

クリスマスカードキャンペーン終了!!

(インター山下 達矢)

こんにちは、クリスマスカードキャンペーンについて報告させていただきます。

今年度のクリスマスカードキャンペーンも、ご支援くださった皆様のご協力のおかげで無事終了することができました!!

ありがとうございます!!!!!!

福島・ウクライナともに、子ども達へ無事届いたとのことです。

本年度は、183の個人及び団体様にご協力いただき、子ども達に発送したカード枚数は、4,259となりました。ウクライナへは1,941通、福島へは2,318通送ることができました。これもひとえに、支援者皆様のご協力があってのものです。どうもありがとうございました。

協力者の方々は年齢も様々で、幼児からご年配の方まで、本当にたくさんの方がカードを書いてくださいました。カードはどれも発想豊かなものばかりで、私自身楽しんでカードキャンペーンに取り組むことができました。またカード以外にも、折り紙を何枚も送ってくださった方もおられます。100以上作ってくださった方もおられます。

キャンペーンの一環として、本年もワールドコラボフェスタへの出展、学童でのカード会の開催を行いました。また支援者の方のご協力で、新しくカード会を開催することができました。今年から毎年していただく予定です。カードキャンペーンの良いのは、どなたでもできる支援だということだと思います。それも楽しみながら支援できるのですから、良いです。皆さん、最初は自信がなくとも、作り始めると夢中になって何枚も作ってくださいます。今年度もご協力ありがとうございました。来年度もよろしくお願ひいたします。

福島で配ってきました!!!!



福島県南相馬市へ、皆さんのが書いてくださったクリスマスカードを配ってきました。自分一人でバスや新幹線で福島まで行ってきましたよ。主に保育園の子ども達へ贈り届けてきました。

どんな子もクリスマスカードにとても喜んでくれました。封筒には折り紙も入っていたので、それにもみんな喜んでくれました。子ども達の笑顔を見ると、名古屋から来てほんとによかったなと思いました。自分はサンタの姿をしてきていたので、子ども達はとても喜んでいました。

もう本物だと信じきって、たくさん手を振ってくれて、ほんとにかわいかったです。とても子どもらしく素直に駆け寄ってくるいい子たちばかりでした。

福島には、今は子ども達も何人も戻ってきていて、復興してきているのだと感じました。しかし、移動中も空き家はとてもたくさんあり、5年たった今でも元通りとは言えないのだと感じました。





フクシマからウクライナから
たくさんのおりがとう！



第4期 富岡町空間線量率 測定結果

(池田 光司)

昨年11月に、富岡町の空間線量率の測定が行われました。富岡町の測定は、2016年3月に始められ、春秋年2回の測定が行われ、今回で4回目の測定となります。南相馬市や浪江町と同様に、500m四方のブロックに区切り、各ブロックの中心付近で空間線量率を測定して、その値に応じて色付けをして空間線量率のマップを作成しています。マップは、南相馬市や浪江町とともにチャル救のホームページに掲載されていますので、ぜひご覧ください。なお、富岡町の測定とマップ作成は、富岡町を中心に活動をされている「NPO法人 がんばる福島」を中心になって行い、チャル救が側面から支援をしています。

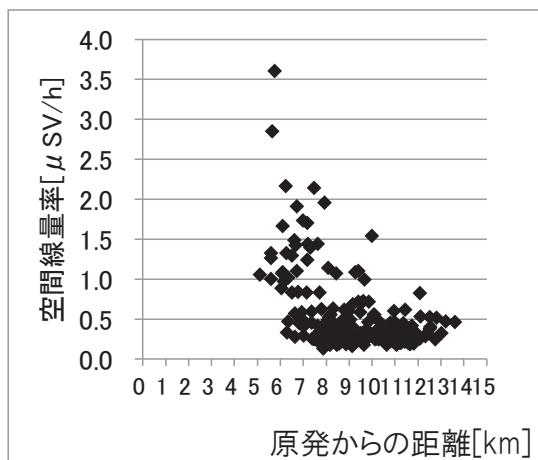
今までの経過と合わせて、今回の富岡町の測定結果を報告します。まず、平均空間線量率が

【表1】平均空間線量率の推移

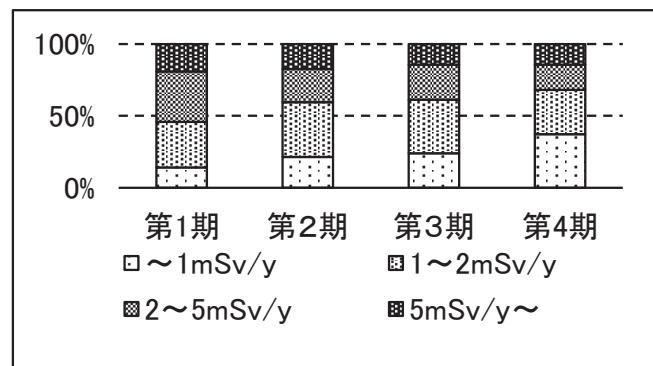
| | 第1期 2016.3 | 第2期 2016.11 | 第3期 2017.5 | 第4期 2017.11 |
|-----|---------------|----------------|---------------|----------------|
| 計算値 | 0.86 | 0.80 | 0.75 | 0.72 |
| 実測値 | 0.86 | 0.67 | 0.64 | 0.56 |

値の方が低いことが分かります。半年毎の下がり方にバラツキはありますが、ここ1年8ヶ月で、物理的半減期で計算されるよりも2倍程度速く空間線量率が下がってきていますが分かります。

次に、【図1】に各ブロックの空間線量率レベルがどのように変化してきたかを示します。【図1】を見て分かるように、年間追加外部被曝線量が1mSv/y未満および1~2mSv/yの空間線量率が高いブロックの割合が増えてきて、逆に、2~5mSv/yおよび5mSv/y以上の高いブロックの割合が減っています。なお、年間追加外部被曝線量は、1年間で自然放射線以外の放射線（主に放射性セシウム）をどのくらい外部から浴びるのかを、測定した空間線量率を基に計算した値です。チャル救がマップ作成で使っている計算式による空間線量率と、年間追加外部被曝線量との関係では、「0.30μSv/hが1mSv/y」「0.50μSv/hが2mSv/y」「1.07μSv/hが5mSv/y」に相当することになります。



どのように変化してきたかを【表1】に示します。計算値は、第1期の実測値（実際に測定した値）を基準にして、物理的半減期でどのくらい空間線量率が下がるのかを計算しています。表を見ていただくと、計算値よりも実測



最後に、富岡町における空間線量率の分布の特徴を示します。【図2】のグラフでは、縦軸が各ブロックの実測値、横軸が各ブロックの中心の原発からの直線距離になっています。左図を見て分かるように、原発に近い所ほど空間線量率の高いブロックが多くなっています。南相馬市および浪江町では、空間線量率の高さが、原発からの距離よりも、原発から流れた放射能を含んだ雨雲（放射性ブルーム）からの距離の方の影響が大きくなっています。富岡町では、空間線量率の分布の様相がずいぶん異なっていることが分かります。

「原発の高レベル廃棄物」地層処分意見交換会

学生79名に、5千円～1万円/名の謝礼等を条件に動員（南箕輪村 原 富男）

原子力発電環境整備機構(NUMO)は、原発から出る高レベル廃棄物を、地中300m以深に埋設する計画を立てている。昨年からは資源エネルギー庁が「科学特性マップ」という「埋設処分が可能か否かを示す」マップを作り、全国の県庁所在地で「住民意見交換会」を開いている。ところが「意見交換会」に、謝礼を持ちかけて大学生を動員したことが発覚した。この問題についてNUMOは調査委員会を作り調査を行った。

調査報告書はNUMOの広告下請け会社が意見交換会に5千円から1万円を支払って大学生を動員したことを認めた。また、電力会社にも動員を依頼し67名の電力関係者が参加したことと明らかにした。NUMOは、「国民の信頼を損ねたことをお詫びする」として、近藤駿介理事長と副理事長の報酬削減10%2ヶ月と、「意見交換会開催」中断を発表した。

「おざなりの姿勢」と「意見を金で買う体质」

このような不祥事の調査には、外部委員からなる調査委員会が作られるべきだが、今回の調査チーム4名中3名は評議員であり、NUMOから給料をもらっている身内である。身内が身内の不祥事を調査するという「大甘な調査体制」である。その調査方法は「参加者にアンケートを送付しその回答を基にした」としている。しかし、住所・電話番号などが解っていても、アンケートの返信が無い場合は、「それ以上聞かなかつ」としている。マスコミに「謝礼」問題の記事が出た以上、金をもらった本人がアンケートに正直に答えることがあるのだろうか。下請会社に聞いた方が早いのではないか。

この事業の元請は、電通と地域活性化研究室の2社であり、その下請けに株式会社オーシャナインズ(東日本担当)、株式会社ビーウエル(西日本担当)がある。学生や学生サークルに声をかけ、現金もしくはサークルのコピー代負担、冊子・ポスターのデザイン、会議室の貸し与え、などを無償で行っていたという。

「お金がもらえるから来た」などと絶対に言わないでください。

調査によれば、「現金の授受は2名しか確認できなかった」としているが、「推して知るべし」である。学生に対する要請文書には「注意点として」

・「お金がもらえるから来た」などとは、絶対言わな

いでください。

- ・現場では、謝礼の話は一切しないでください。
- ・来た理由を聞かれたら、「友人に誘われて」など、当たり障りのないようにしてください…とある。
- * 金銭授受は秘密とされていたが、埼玉会場で学生が「参加すれば1万円もらえると聞いて参加した…」と発言したことから、金銭授受が明らかになった。

利益を共有する電力関係者67名も参加。

意見交換会への参加要請は「利益を共有」する電力各社にも行われ、東京電力はじめ電力関係者67名が、一般参加者として参加したことが明らかになった。NUMOは、電力各社をはじめ、電力グループ会社・経済団体・商工会議所・地方公共団体・大学・地域の各種団体にも、参加を呼びかけた。

意見交換会は2014年から行われているが、ここ2年間の参加者数は減少しており、9名とか11名の会場もあったという。

本質的問題は原発推進政策

調査報告書は、不祥事の原因を明らかにしていない。「公正を欠いた」というだけである。「謝礼を条件に学生を動員した」ことだけに、問題を矮小化してはならない。根本には「原発稼働に伴う廃棄物の処理方法がない」にもかかわらず「無責任に原発を稼働してきた」原発推進政策がある。いまや廃棄物は、どの原発においても「保管の限界」にきており。廃棄物の点からだけでも原発に未来はない。これまで脱原発のチャンスはあったはずである。

海外では福島原発事故を教訓に、ドイツ・イタリアなどが原発から撤退することを決めた。また中国も、原発から再生可能エネルギーに大きく舵を切った。ところが、御膝元の日本だけが原発推進政策を転換せず、再稼働に向かったのである。事故後の再稼働は5機(伊方が裁判で停止し：現在4機)である。

「NUMO」は、「将来世代に負担を先送りしないよう、現世代の責任で処分の道筋をつける必要がある」という。耳触りの良い言葉だ。負担を先送りしてきたのは誰だ。ならば「先ず原発を停め廃棄物の排出をやめてからしてくれ」と言いたい。

「廃棄物は出し続けます！ 地層処分はさせてくれ！」そんな話には乗れない。

事務局便り

12月、静岡サレジオ小学校のクリスマス会にご招待頂いた。今回は全学年がテーマ毎に、そして参加した子ども達全員が演じた。その熱演に目はくぎ付け。この子ども達と保護者の方々が、22年間に亘りチャイルドボイリ支援を続けて下さっている。それを支えて下さった一人のスターが今年サレジオを去られる。吉平須美子先生。チャイルドボイリへの深いご理解と強い支援のご意志を持ち、22年間にも及ぶ間、サレジオ小の子ども達の活動を支えてこられた。先生は今後も「子ども達」のそばに寄り添う仕事をされるとの事。ホステージ基金のドンチェヴァさんは見事に表現された。先生は、日本とウクライナの子どもにとり守護天使と。ひたすら感謝。いつまでもお元気で。

(山盛)

会計より 年末カンパへのご協力のお礼とご報告

昨年末はカンパ要請へのご協力をいただきまして、本当にありがとうございました。

おかげさまで 12月の1ヶ月間で、なんと 1,254,944円のご寄付が集まりました！！

そして何よりありがたいことに、**127名**の方々がご協力くださいました。心より感謝申し上げます。内訳は、ミルクキャンペーン：**248,000円**（目標額を達成！）、チャイルドボイリ支援：**156,000円**、福島支援：**36,000円**、指定なし：**814,944円**です。

この財政難に会計係として一番危機感を募らせていたのですが、今はホッと胸をなでおろしています。しかしながら、3月末までの目標金額には達しておらず、どのように資金を得るか日々頭を悩ましています。引き続きご協力をお願い申し上げます！

(兼松)

編集後記

☆女性の願い事を必ず一つ叶えるという神社が鳥羽にあり、郵便でも願い事を受け付けるらしく、その専用封書を友人からもらった。さんざん考えて送った願い事…叶うかなあ。（佳）

☆2階から外を見ると、気づかぬうちに空家との境に屋根を超える高さの桑の木…。見下ろすと庭がゴミ箱状態に！寒空の下で風に飛ばされて来たビニール袋と枯葉拾い…トホホ。（美）

☆（P4 *上がらぬ「帰還率」！…の続きを兼ねて）

★印の町村は、軒並み一桁台の帰還率。★印の小高区ですら、1年半が経過した今も、20%に届かず足踏み状態である。その間に家屋の解体は進み、歯が抜けるように空き地が増えていく。商店や医療施設などのインフラ不足が、住民の帰還を阻んでいるのか？住民の帰還の遅れが、インフラの拡充を阻んでいるのか？鶏と卵の論争が堂々巡りをしている。しかし、答えは一つである。「前者」のインフラを先行させて、住民をバックアップする以外に方策はない。行政（国政）はどこに向いているのか？その責任は重い。今回の南相馬市長選の結果（わずか200票差）が、住民の気持ちを如実に示している。半数は、前市長の人柄に希望を持ち続け、半数は、国政に淡い希望を抱いている。復興の道のりは長いが、人々が希望を捨てないかぎり、希望が人々を見捨てる事はない。農業の復興・再生も同じである。高い理想を掲げ、希望を捨てない「孤高の人」を、「孤独の人」にしてしまってはいけない。（J）

〒 456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷 「エーフリント」
TEL・FAX (052) 871-9473